
紅玉しぐれ

藤ノ宮 空雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅玉しぐれ

【Nコード】

N7482P

【作者名】

藤ノ宮 空雅

【あらすじ】

連載中の長編「Red fraction」の番外編。悪友コンビ・深見と慧の日常談話。家族のように思っていた保護者に積年の想いをぶつけられて戸惑う慧と、その葛藤を見守ることしかできない深見の短編です。本編読んでなくても読めると思います。

紅玉しぐれ（前書き）

！注意！ この作品はB L要素を含みます。嫌悪感を抱かれる方はお読みにならないようお願い致します。

紅玉しぐれ

元・東郷会直系紅貞組若頭、現・矢車組新人舎弟、深見 晶。

普段から堪忍袋が短く、それでいて世話焼きである彼は、困っている者を見ると捨てて置けない性分を持つ。厄介事と分かっているも首を突っ込み、意に介さない部分を発見すると、それが修正されるまで口喧しく説教をする、という関西のオカンのような存在だ。

しかしそんな深見も唯一、口を紡ぐ時がある。

中学時代からの腐れ縁、深見の人生を狂わせた同い年の悪友、山崎 彗が酔っ払っている時だ。一応世話になっていた時期もあるのに未だに友人の域に留めてやってはいるが、酔って顔を合わせる度に「もうコイツとの仲はこれまでだ」と決意するほど迷惑を掛けられている。

それでもどうかこうにか譲歩してやっているのは彗の虚弱っぷりが目に余るせいだ。放っておくと酒ばかり呑んで飯を食わない、走れば転ぶ、身体中に刻まれた古傷の痛みに苛まれて苦しむ。それなのに彗は人をまったく信用しておらず頼ろうとしない。

深見は狂犬という仇名に相応しい、過敏な洞察力を持っている。彗からは面倒を見てやらねば死にそうな匂いが嗅覚を破壊せんとばかりに漂ってくる。だが、それは他の者には微弱な匂いで、深見だけが感じ取れるものらしい。

だから洪々、面倒を見てやっているのだ。目の前で人がもがき苦しんでいたら誰だって助けるだろう。泣き喚いていたら話くらいは聞いてやる気になる。話を聞けばアドバイスの一つもしてやりたくなってくる。

そんなこんなで深見は長年に渡って、彗の面倒を見てきた。

しかし、これはさすがにどうしようもない。

深見が口出しできる問題ではないのだ。当事者同士で解決するべきなのだ。昔から言われている常套句にもあるだろう。人の恋路を邪魔する者は馬に蹴られるし、恋煩いにつける薬はないのである。

「もうやだ。俺、アキんちの子になる」

艶やかな短髪、平均的な目鼻立ち。一見すると中小企業に勤めるサラリーマンにしか見えない慧は今日も今日とて呑んでいた。

娘・遥と2人暮らし、時折異物が入り込むことはあるが、あくまで、断じて、断固2人暮らしな深見家の玄関に現れた時から、ベロベロに酔っ払っていた。片手にワンカップを詰め込んだコンビニのビニール袋を携えて、もう片方には一升瓶を握り締めて、公共の場であるマンションの廊下でインターホンを使わずに「アキいいい！開けてえええ！」と無遠慮に叫んだ、紛うことなき酔っ払いである。

そんな酔っ払いの慧は現在、深見家のリビングに座り込み、ペタリとフローリングの床に頬をつけて撃沈した状態で、それでもワンカップを手放さずにメソメソと半泣きで恨み言を吐いている。

「なんなの、あの強姦魔王。なんでこうなったの、あのシヨタコン魔王。俺はホモじゃない。まったくもってホモじゃない。童貞だからってなに。もう百歩譲って童貞だってバレてることは考えない。そこは尊重すべき個性？いっそのこと悟りの境地に達した。でも俺が童貞だからって誰かに迷惑掛けた？むしろホモかもしれないっていう方がはた迷惑だよ。アキが今、俺のストレス発散とお悩み相談っていう二次被害に遭ってるんだから。人に迷惑を掛ける性癖はよくない。お願いだからほっといてよ。親子でいって。なんなの、ホント。なんで俺なの？どこに魅力があるの？俺、もうちっちゃくないよ。27歳から29歳くらいがいい大人だよ。って、本人に言ったら？犯すぞ？だって。日本語通じないんだけど。なにアレ獣？男は皆、狼なの？」

矢車本家の開かずの間から聞こえてきそうな湿った声を聞いた深見は、PSSのコントローラーを握り、テレビ画面の中から襲い来るゾンビをヘッドショットで一撃死させつつ思った。

たしかに俺は大迷惑だ。てめえが俺んちの息子になったら遙に絶大な悪影響が出る。それ以前に俺が魔王の襲撃に遭うだろ。だから断る。大体、てめえがこの年になっても童貞だとか知りたくなかった。意外とそんな噂は回ってねえから安心しとけ。自分がホモだったのは確かに信じたくねえかもしれないけど、俺が見てる限り、てめえはしつかりがつりホモ確定だ。そんでもって魔王はシヨタコンじゃねえ。てめえ限定だ。長年、周囲が親子愛だと思ってたもんが全部、欲塗れだったって事實は衝撃かもしれないけど、んなもん自業自得だろ。地球一周巡って増幅された、てめえ発信の不幸が最終的にてめえに返ってきてんだ。傍から見と世界を巻き込んだ痴話喧嘩以外の何者でもねえ。おとなしく受け入れる。さつさと自分の気持ちに気づいてまとまれ、このファザコン。

深見は表情を変えないまま心の中で喚いた。そうしてチラリと隣に転がる慧に視線をやり、コントローラーのスタートボタンを押して立ち上がった。

すかさず伸びてきた指先がシャツの裾を掴む。

「アキ、どこ行くの？」

「腹減ったからメシ作る」

「俺、生クリーム食いたい」

「糖尿病で死ね」

言い残して、掴まれたシャツの裾を勢いよく引つ張った。慧の右手は指が2本しかない。元より強く引き止める気などなかったのだろ。すんなりと離れていったので見向きもせず、台所へと向かう。慧は即座に深見の後を追ってきた。

「アキ、アキ。ねえなんで？怒ってるの？別に、本気でこの家に住もうとしてるわけじゃないよ。ゲームの邪魔もしてない。ひよつとして俺がうるさいから？でもそれって俺を家に上げた時点でわかつ

てたよね。わかっててもイラついてるの？だつたら黙る。おとなしくしてる。だから怒らないでよ。機嫌直して。嫌わないで。置いてかないで」

流しに向かつて立つ深見の腰に腕を回し、背中に額を押し当てて泣き言を吐き出してくる。

嘘くさい。エセくさい。信じられるはずがない。普段の行動を思い返せ。どれだけ人を騙してきた？そんな戯言が俺に通じると思わない。

思えども言葉にはならず、深見は足でダイニングテーブルのイスを引き寄せ、無言のままに顎でイスをしゃくり、彗に着席するように促した。

そうして鍋をコンロに掛けて湯を沸かし始める。

「はちみつ？レモンはやだ」

深見が手にしたビンを背後から覗き見て、彗が言った。

「そもそもレモンがねえ。リンゴだ」

深見は彗の両腕を引き剥がし、冷蔵庫の野菜室を覗き込んで、端と端に分けて置いてあった黄色と赤を見比べながら返答した。

「俺、実はさつき無断で冷蔵庫、開けたんだけど」

「うるせえ。黙れ」

「うん」

宣言どおりにリンゴを取り出して戻ってきた深見を真っ赤に充血した彗の目が出迎える。近頃、再びよく見かけるようになったその目は昔、小学校の飼育小屋で飼われていた白ウサギを思い立たせて、酷く気に食わない。

スーはあんな弱っちい生き物じゃねえだろ。

檻の隙間から差し出されたクローバーをおとなしく食んでいたウサギの姿を思い出し、眼前で丸くなっている彗を眉間に皺を寄せてじっと睨みつけた。彗はイスの上で膝を抱えてパチパチと瞬きを繰り返しながら、不安そうな表情を深見へ向けている。

やはりあのウサギと似たような気配を感じたが 惑わされては

ならない。これも一種の詐欺かもしれない。

普段の彗は狡猾で強かなペテン師だ。存在そのものが嘘で構築されていて、自身の命が風前の灯になっていても、出来のいい笑顔を顔に貼り付けている。

それが揺らぐ事柄は全て、あの魔王に起因していて。

揺らいだ時、深見に擦り寄ってくるのは、かつて魔王と肩を並べていたのだという、別の誰かの面影を深見に見ているからだ。

そう考えると余計に苛立ちが増した。オドオドとこちらを伺う目も、イスの上で膝を抱えている姿も、その手の中に未だワンカップが握られていることも、おとなしく黙り込んだことも、何もかもに苛立つが、なけなしの忍耐力を収束させて腹のうちに押し込み、あえて口には出さず、代わりに洗面所へタオルを取りに行つて水で濡らしてから投げつけた。

「なにこれ、無言の抗議？」

「さつきから喋つてやってんだろ。目え冷やしとけ」

「優しいアキって気持ち悪い」

「……てめえ、」

「嘘だよ。半分」

「もう半分はなんだってんだ」

「照れ隠し？」

「気持ち悪い」

「うん。俺の気分が伝わったみたいでよかった」

ふふつ、と鼻を鳴らして首を反らし、目元に乗つけたタオルを両手で押さえつける彗の姿は、やはりいつもどおりで、とてもじゃないが酔っているようには見えない。生粋のアル中だからなのか、生来のペテン師だからなのか、彗はどれだけ酔っ払おうとも雄弁で弁舌爽やか、顔色はいつもどおりに青白く、目つきだつてしっかりしている。それゆえに尚更、泣いているのが嘘くさい。

「アキ。ねえアキ」

水滴がステンレスの流し場に落ちて、彗が再び喋り出す。

「俺はホントに思ってるよ。アキンちの子供に生まれてたらよかったって。だって遙ちゃんに幸せそうだから。羨ましい。いいなあ。すごく羨ましいよ。ウチの魔王パパは怖いもん。見た目からして。こないだも子供泣かせてた。通りすがっただけで。なんか邪悪なオラ出してるよね、あの人。地上を闊歩させちゃダメだよ。地獄に帰るべきだって言ってるよ」

「俺は命が惜しい」

深見はリンゴの皮剥きから目を離さずに対応した。

「アキって臆病なの？」

「魔王引き連れて街頭インタビューしてこい」

「いくら払えば言ってくれると思う？」

「命は金で買えねえもんだ」

「そうかな。案外100万くらいで言ってくれそう」

彗は楽しげに言って、目元を押さえたまま自らの膝へと顔を埋めた。手を止めてチラリと横目に盗み見た肩が小刻みに震えているが、口元は笑顔の形に歪んでいるので見ないフリをする。

湯の湧く音とコンロの火が混じって温かな湯気を生み、換気扇は低く唸って、シャリシャリとリンゴの皮が剥けていく。

「真人さんが、俺のことを好きなんだって」

部屋の中に甘い匂いが充満して、鍋の中のリンゴが飴色に変色する頃になって、黙り込んでいた彗がようやくポツリと本題を吐いた。「俺は、そういうのは求めてない。恋だとか、愛だとか。そういうのは重い」

換気扇が一際強く唸りを上げる。甘い匂いを消し去ろうと、壁の向こうの寒気の中へと排出しようと懸命に回る。

「アキみたいなのがいい。あの人も、優しいだけでいい」

搾り出された声を咎める代わりに、深見は換気扇を切った。

この天邪鬼な悪友が早く甘さに慣れてしまえばいいと願いながら。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482p/>

紅玉しぐれ

2011年2月21日14時40分発行